

〔研究ノート〕

スピリチュアルに生きる人々(3)

伊田 広行

前号に引き続き、私の提唱する〈スピリチュアル・シングル主義〉的な生き方や思想や行動に近いと思えるイメージと具体例を紹介していく。

アンジェリーナ・ジョリー

『トゥームレイダー』で有名な女優アンジェリーナ・ジョリーさん¹⁾は、『トゥームレイダー』の撮影で2000年にカンボジアに滞在したとき難民や貧困に喘ぐ人々をみたことや、イギリス生活で、アメリカではあまり目にしなかったヨーロッパやアフリカに関するニュースに日々接して社会問題を考え出した。『すべては愛のために』の脚本を読んで、心を揺さぶられ、もっと深く理解したいと思ったことの影響も大きかった。

それで、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)²⁾、ユニセフ、世界食料計画 (WFP) など国連の活動に関する書物を何冊も読み、衝撃を受けた彼女は、国連・UNHCR に連絡をとり、人道活動に(無償、費用自己負担で)協力すること、難民キャンプなどで実態を学ぶ希望を申し出た。売名行為ととられないよう、彼女はどこにも公表せず、2001年2月から8月の6ヶ月間、難民キャンプを訪問する旅に出て、シェラレオネなどの難民キャンプでUNHCRの現場職員とともに厳しい経験をした。それを通じて彼女は人生観を変え(覚醒したと彼女は言う)、人道活動をライフワークにすることを決めた。

2001年8月彼女はUNHCRの親善大使に任命され、その直後に起きたNY9・11テロ事件に対しても、彼女のスタンスは、米国の立場から対テロ戦争支援をいうのではなく、アフガニスタンとその周辺諸国で大量発生するとみられた難民の救済活動支援として100万ドルの寄付を行うというものだった。映画『すべては愛のために』の撮影途中の2001年11月には、彼女はカンボジアの孤児院を訪れて、0歳児の男の子マドックスを養子に迎え、今彼女の最も大切な人となっている。カンボジアには内戦の後遺症で今でも数多くの地雷

1) この項目は、ジョリー主演映画『すべては愛のために』(2003年米映画)のパンフレット、および『ビッグイシュー』(第2号、03年11月)のインタビュー記事よりまとめた。

2) UNHCRは、難民に国際的保護を与え、難民問題に解決をもたらすための国連機関(1950年設立)である。世界各地で、500以上の民間援助団体NGOと協力しながら、難民流出という緊急事態に対応して、食料や水、避難所を提供し、難民キャンプで暮らす人々の生活を支えている。難民の故郷への帰還、再定住支援も行っている。

があることを知った彼女は、その後、地雷除去を訴える活動も始めている。

その他、映画『すべては愛のために』を通じて UNHCR の活動を宣伝したり、カンボジア北西部のポルポト派に破壊された広大な森林を修復し、自然保護区を設立するため、および地雷被害者の義足生産支援のために、今後15年間に渡り500万ドルを寄付しつづけることを表明するなど、多彩な活動を続けている。03年10月には国連からも表彰された。

彼女は言う。「焦点ははっきりみえている。かつてはエネルギーをどこへ向けるのが良いのかわからなかった。自分がどこへ向かっているのか、何を求めているのか、自分の人生、そして周りの人から何を得ようとしているのか、見当もつかなかった。……（難民キャンプに行くなどの活動をした後）……私の人生においてきわめて重要な出来事のひとつが、そこで、すべての手足を吹き飛ばされ失った4歳の小さな女の子に出会ったことだったの。そのような子どもを目の前にすると、それ以外のものはかすんで見える。……今の私にとって、人生はより重要な意味をもつ。」

「日本の10代の女の子がひとりでもいいからこの映画をみて“私も、何かしなくては”と思ってくれたなら、素敵なことだと思うの。小さな力でも、やりつづければいつか世界が変わることを信じて欲しいわ。」

「夜回りの水谷」

定時制高校の教員、水谷修さん³⁾は、12年前に全日制進学校から夜間高校に転勤して、簡単に教育活動できない困難な状況実態に直面し、まず生徒と人間関係を作ることが必要と思って、横浜の夜の繁華街に出て、子どもたちに声を掛ける活動を始めた。最初は自分の学校の生徒だけに声を掛けていたが、制服を着ている生徒はいっぱいいると気づき、片っ端から声を掛け、自宅の電話番号を記した名詞を配るようになった。

そうすると「警察に捕まりそうだ。何とかしてくれ」といった電話がかかってくる。それに対し、「うん、捕まろう。捕まって罪を償った上でなら何とかしてやろう」といって、自首させる。暴力団から抜け出そうとする子に関わって危ない目にもあった。また薬物問題にぶち当たり、それを学び、今では薬物相談もあって、電話は夜中でも鳴りっぱなしという。今、関わっている薬物依存者は何百人もいる。

彼は、夜の町にたむろする子どもたちや薬物依存になる子どもたちは、つらい事情を抱え、学校や昼の町から追い払われている（それに対し、夜の町はいい獲物だから優しくしてくれる）と捉え、話を聞き、低い自己肯定感自体や大人の側を変えなくてはと考える。それで、授業のない午前中と休日に年間200回の講演も行い、教員に訴え続ける。「いつでも側についている。一緒に薬をやめよう」と約束したからと、いくら忙しくても頑張りつづけている。常に自宅には、両親が刑務所にいる子どもや薬物中毒から立ち直ろうとする子など、預かっている子どもが数人いるという。

3) 彼はその活動が認められ、2002年に、「第17回東京弁護士会人権賞」を受賞した。ここの内容は、人権教育啓発雑誌『アイユ』03年12月15日号、および『毎日新聞』02年11月5日記事よりまとめた。なお、2004年に水谷修著『夜回り先生』（サンクチュアリ出版）が出た。

その精力的な活動の背景には、ひとつのつらい経験があった。12年前に、シンナー漬けの教え子（当時16歳）が、「先生と暮らせばシンナーをやめられる」というので、一緒に暮らしたりして関わっていた。しかし当時、水谷さんは薬物の知識がなく、その子どもが薬物乱用治療専門の病院につれていってくれといったとき、自分の子どもと同じように愛情をもって接しているのに、自分ではダメといわれたように感じて、少しむっとした。それで今晚、先生の家へ行ってもいいかと聞かれたときも、その日は彼の実家の方へ追いついた。その4時間後に彼は自宅近くでダンプに飛び込んで死んでしまった。おそらく薬物幻覚によって何かきれいなものと思っていたのだろうという。

もう教員を続ける資格はないと思ったが、死んだ彼が行こうとおもっていた薬物治療専門病院で「薬物をやめられないのは依存症という病気だ。病気は愛の力や罰則では治らない。医療でしか治らない。あなたは学校を辞めようと思っているが、今、青少年に薬物依存が広がっているときに、教師でこれに取り組んでいる人がいないのだから、それをやるべきだ。いっしょにやろう」と医者にいわれた。それでそれ以降、薬物について学び、病院や警察、リハビリ施設にも人脈を広げ、薬物依存症対策専門家になっていった。行動する人、しんどい人の側に寄り添う人は、ほんものにまともだ。

斎藤武さん（チャプレン）の話聞いて

斎藤武さんのお話を日本ホスピス在宅ケア研究会のスピリチュアルケア部会で聞くことができた。その話を私なりの言葉もいれて、まとめてみると次のようになる。

人はそれぞれに、自分の道理（自分の一番心の奥底あるいは中心にある、生きる理由——これは伊田の言葉では〈たましい〉に近いと思うので以下ではそれを用いる）を持っています。ここでいう〈たましい〉は、その人が生きている根本的な道理のことであり、「本当に大切にしているもの」ともいえます。それは「宗教」ではなく、「その人が一番信じている大切なもの」、「信念」です（斎藤さんはこの信念のことを「信仰」と言っていた）。

しかしその深さ（それに気づき、それを目指している程度＝スピリチュアル度）は人それぞれです。死や人生の危機に臨んで、自分の道理（〈たましい〉）に触れ、それに向き合い、それが深く求めているところに向かうことで人は成長していきます。スピリチュアル度を上げていくことが成長です。

自分の〈たましい〉が見えない（生きているスピリチュアルな理由がいえない）と本当には生きていくのが苦しくなります。「ごまかし」は実はつらいものです。浅い人生は深い満足を与えてくれません。

そのことに向き合い、自分で自分の人生の〈たましい〉をみつけていき、自分の生き方を修正したりランクアップしたりして、本当の自分の人生にしていくのが、成長です。

各人が、自分の生き方に〈たましい〉レベルで責任を持って生きていくという深いところでの「成長」に、寄り添い、援助するのがスピリチュアルケアをする者の役割です。そ

れは、上から答えを与えたり導いたりするものではなく、一緒に探していく、一緒に現場で転げまわっていくということです。それは関わる人自身の成長になります。寄り添うために、そして相手を理解するために、聴く（傾聴する）必要がありますが、そのとき聴くのは、相手の〈たましい〉であると同時に、実は、自分自身の中心の声、〈たましい〉なのです。

もう少し具体的には、相手の深い部分に関わったり聞いたりするためには、まず、自分が正直に〈たましい〉を剥き出しにする必要があります。

それは、常に自分がなぜそうなのか、自分の反応の深い部分、その感情の出所（でどころ）はどこかを正直に見つめることです。そういう自分の〈たましい〉を探っていく。何を信じているから、どのような信念があるから、そういう行動をとっているのか。どういう基準で、何が基礎になって、それを言ったり行ったりしているのか。

それを“正直”に行うためには、自分の危機に直面し、自分の無力さや駄目さや〈弱さ〉を知り、ゼロになっていくことです。「偉そうな自分、自信のある、成功している自分」が行き詰まる経験こそスピリチュアルな契機です。クレイゴトや競争、能力主義の世界から離れ、自分の一番中心の生きる理由に向かうことです。頭で理解するのではなく、口先で説明するのではなく、「背中であを伝える」ような力が必要です。

それができてこそ、相手の、一番中心の生きる道理にも触れられます。そこに近づくような「問い」を出し、相手の自己洞察を援助することができます。問いも「どんな気持ち？」「なんでそうなの？」などと一般的に聞くのではなく、相手が答えられるように聞くスキルを鍛えることが必要です。

この観点からいうと、ホスピスで一番大切なのは、施設ではなくハート、〈たましい〉です。特殊病院になっては駄目です。狭義の医療として病気を治すという「技術」、量的数字ではかれるようなものとみるアプローチでは駄目です。在宅が基本で、施設などは拠点となるべきなのです。

「貧乏人大反乱集団」

法政大学で「全貧連（全日本貧乏学生総連合会）」初代会長として暴れまわった松本哉さん（27歳）が中心になって、街頭に進出して、新宿アルタ前や大久保などの「駅前で鍋をやる」という形で、街中に解放区を作ってしまうおうという「運動」をしているのが「貧乏人大反乱集団」である⁴⁾。今の日本社会が競争管理社会で金持ちばかりがのさばっており、地位も名誉もないノンエリートの貧乏人間にはとても生きにくい状況であることに異議を申し立てるのだが、そのやり方がユニークで、「貧乏人が世の中をひっくり返そう」「株価大暴落金持ちざまーみろ」という挑発的なスローガンを掲げ、「まっとうな人生」など蹴散らかし、開き直って、貧乏人の自分たちが世の中にはびこりまくるようにしようと

4) 活動については、『人民新聞』2001年12月15日号のインタビューと資料「貧乏人新聞・街頭版刊行宣言」よりまとめた。

いう。

そのために街頭で鍋をするという一見馬鹿馬鹿しい行動をとるのだが、それはそこに既成社会に対する異物を存在させ、そこでの異端者たちの相互交流を生み出し、アナーキーなエネルギーの中から何か新しいものを生み出す真に社会変革的で文化的な行動であると考えるのだ。そしてその意味でこれはとても新しい政治的な運動だと。

一般論を言ったり、むつかしい理屈をつけたり、大きなシステム改革を目指して運動するという既成の活動のやり方を批判して、松本さんは、今生きてる場・街を楽しくのびのびとしたものにしたいと考え、普通の人間が直の人間関係^{ちよく}を作^{ちよく}って、直接行動に出ていくのがおもしろい、だから鍋は重大な政治的最終目標だという。ビラをいっぱい撒いて、新宿でも70人くらい集まったらしい。

おもしろい。実践しているということ、価値観をひっくり返すものであること、運動スタイルが新しいこと、禁欲的でなく楽しく、善悪・聖俗を超えてラジカルな点で、これは〈スピ・シン主義〉的とおもう。

ラコタ族からの学び

ネイティブ・アメリカンやアイヌの人々から学ぶものが多くあることは、私には「出発点」とでも形容すべき「明白な現実」である⁵⁾。私が触れたものはほとんどそうだが、例えば阿部珠理氏の『アメリカ先住民の精神世界』(阿部 [1994])も、アメリカ先住民ラコタ族が伝える積極的な精神世界を提示してくれる。それは〈スピ・シン主義〉の香りを提供してくれる。

ラコタ族は、自然に宿るスピリット(霊; 宇宙を作った神)をワカンタンカといって尊重するが、そこには私たちが学ぶべき視点が数多く含まれている。

まずラコタ族では、癒す力をもったメディスンマンは、その力が与えられた物であるので、その力を自分のためだけに使ってはならず、また癒しに報酬を求めない(儲けない)。これは商業主義に走る日本の大方の宗教/新霊性運動の状況と大きく異なる点である。また、ラコタでは、上記の自然観をベースに、寛大(自分に大切なものを気前よく与える)、勇氣(他人の困難を救うために発揮するもの。行為は心の実践である)、敬意(動物植物、山川自然すべてに敬意を払い尊重する)、智慧(心の目でものを見れば、行動は自ずと自然に調和する)の4つが美德とされる。

こうした「利他の精神」の背景には、人は自分だけで生きているのではない、人の命はみなつながっているという「輪」の思想がある。だから日本と違って所有の多寡や、知識の優劣、社会的地位・肩書きで人を判断することはない。人が人にへつらわないし、偉そうにしない。大事なことはスピリットのある知恵ある生き方を学び、実践することである。相手から学ぶには、知識を収奪するのではなく、相手の歩調で歩くこと、相手の存在に尊敬

5) 例えばピクマル [1996], スティーブ・ウォール&ハービー・アーデン [1997] ジェーン・キャッツ編 [1998], 萱野茂 [1990], シオドーラ・クローバー [1991], デニス・バンクス&森田ゆり [1993], Curtis, Edward S. [1997] などから学ぶことができた。

を示すことが重要であると考え。その人の智恵や経験、寛大さ、思いやりなどの内面性が評価される。日ごろの行いが悪ければ、口で立派なことを言っても人を説得できない社会である。

以上と関係するが、ラコタでは「ミタクエオヤシン」（私に繋がるすべてのものという意味）という考え方で人との関係を捉える。つまり、「人間（自分）は一人では生きていない。すべてのものが繋がる生命連鎖・社会連鎖の輪の中の、一つの存在でしかない。すべてのものとは人間ばかりではない。人間は中心でもない。すべてのもののおかげで、自分が生かされ、また自分はそれらのもののために生きる」と考え、他者や自然を大事にするのである。こうしたラコタ族の人々の考え方と生き方は、私たちが心に留め、自分を省みる基準とするに値するのではないだろうか。

真剣に自分の生き方をみつめる先人たち

〈スピ・シン主義〉は、真剣に自分の生き方をみつめた先人たちの生きざまから、自分の人生に向かう姿勢を学んだ結果の思想である。多くの偉大な人たちが、単に自分のためだけに生きる人生を反省している。その理由には必ずしも完全に同意することはできないが（宗教的・時代的制限がある）、各人がみな真剣に自分の人生に向き合ったことは疑いえない。そこから学ばずにはいられない。以下、その中の数人を挙げてみたい。

トルストイ

文学史上の巨匠、レフ・トルストイは、前半生の作品（『戦争と平和』『幼年時代』等）によって作家として大成功をおさめ、また裕福な地主貴族として申し分ない生活を送っていたが、40代に『アンナ・カレーニナ』の執筆終盤にさしかかる頃、人生の意義と目的をめぐって大きな精神的危機を迎えた。人生をどうすればいいか、今の社会のおかしさにどう向かうかについて極限まで悩み、それを作品（『アンナ・カレーニナ』『どんげ』）に投影したり、社会事業（農民の生活向上、教育）に携わったりしたが、その後、トルストイズムといわれる、彼独自の宗教的見解に行き着いた。それまでの生活も作品も悲しむべき迷いであり誤りであったとし、幼年時代のキリスト教的信仰を基礎に、そこから神秘主義の側面を除いた合理的な宗教——内面的には自己完成、外面的には悪に対する無抵抗主義——を提唱した（トルストイの転向）。社会問題においては、政権や軍隊、私有権や裁判など当時の社会組織が、人間の自由を束縛する暴力となっていると批判し、宗教的無政府主義を唱えた。そして、「神聖なる土」という理念の下、神への信仰に支えられながら額に汗して働く、質素な農耕生活を理想に掲げ、みずからも一部、実践した。農民的な服を着て、酒タバコ、肉食を絶ち、野菜と黒パンを食べ、畑を耕し、水を運ぶ生活を送り、それと並行して活発な啓蒙活動を行い（宗教論、芸術論、民話形式の啓蒙等）、正教会から破門され、政府からは弾圧を受けながらも、精神的な指導者として晩年を過ごした。自己の信念にしたがって、土地や財産を貧しい人々に分け与えようとまでしたが、家族の反対を受け、言行不一致、家族内不和で悩んだ。

宗教的転向後、彼は芸術への態度も変更し、読者（大衆）の感情を通じて真理を伝える芸術、大衆にわかりやすい芸術、読者の人生に役立つ芸術であらねばならぬと考え、キリスト教の愛の教えを農民や労働者にたやすく理解してもらえぬ形として、民話の形で作品をいくつも作った（『人は何で生きるか』他、トルストイ [68]）。民話はみな、エゴを捨てて他人を愛し、貧しいものを助け、神に感謝する生活を送れば、ゆるぎない幸福を得られることを素朴ながら説得的に説いている。こうしたトルストイ主義は、その宣伝のために刊行された廉価版叢書『仲介者』シリーズによって広がった⁶⁾。

「私はこういうことを悟った。すべての人は、自分のことを思う心でなく、愛によって生きているのだ」、[私が人間になってから、無事に生き残ったのは、自分で自分のことをいろいろ心配したからではなく、通りかかった人間とその妻に愛があって、私をかわいそうに思い、私を愛してくれたからだ。……すべての人間が生きているのも、みんなが自分のことを心配しているからではなく、彼らの中に愛があるからだ]、「今こそ私は悟った。人は自分で自分のことを心配しているから、それでみんな生きていけるのだと思っているのは、ただ人間にそう思われるだけで、ほんとうは愛によって生きていけるのだ。愛のなかに住むものは神のなかに住んでいるのだ。』⁷⁾

「お前は憎しみのために目がくらんでおるのだぞ。他人の悪いことは目の前に見えても、自分の悪いことは背中の方に隠れているものだ」、[むこうがびんたを張ったら、こっちはくると向き直って、もう一方のびんたを出してな、もしそうされるだけのことがあるのなら、こっち頬もぶつてくれというのだ。するとむこうも良心というものがあるから、気が折れて、こっちの言うことを聞いてくれる]⁸⁾

「人が自分の働きで暮らすのをやめて、他人のものをうらやましがるようになったからでございます。昔はそんな暮らし方などしませんでしたよ。昔は神様の掟どおりに暮らして、自分のものを持つだけで、他人のものに欲の皮を張りませんでしたからね」⁹⁾

ヘンリー・D・ソロー

自然の中に生きた記録であり、哲学の書である『森の生活』（1854年刊）を記したヘンリー・D・ソロー（1817-1862）もまた、真摯に自分の人生に向き合った人である。

湖、森、河川、丘など自然豊かなコンコード（米国、ボストン近郊）で育ったソローは、大学卒業後、小学校の教師になったが、体罰を与えることを拒否して3週間で学校を辞めた。自分で私塾をひらき、つとめて戸外での授業や観察をおこない、知識を実生活に結び

6) 以上の内容は、トルストイ [1968] の訳者（米川正夫）解説による。

7) トルストイ [1968] 42-3 ページ。

8) トルストイ [1968] 76, 78 ページ。

9) トルストイ [1968] 94 ページ。

付けることに重点をおいた教育を行った。そんな中で、彼はエマソンに出会い影響を受ける。超越主義 (transcendentalism) を唱えたラルフ・エマソン (ソローより14歳年長) は、1836年に超越主義の綱領ともいべき『自然』を出版して、「超越クラブ」を発足させた人物である。その主張は、自然を人間の進歩の原動力とみて、自然の偉大さと神秘性を詩的な文体で語るものであり、実在を認識するに当たって客観的経験より詩的直感的洞察力を重視する態度であった。

ソローはこの超越主義者グループの機関紙に投稿したり、その編集に関わるようになっていき、エマソンがウォールデン湖周辺の森を守るために土地を購入したことを契機に、ソローはエマソンの同意を得て、湖のほとりに小屋を建てそこで2年2ヶ月の自給自足・独居生活をはじめた。その記録とそこでの思索が『森の生活』である。この湖畔生活中、奴隷制を支持しメキシコ戦争をすすめるアメリカ政府に反対して納税を拒否したため、一時逮捕された。これに対し、「市民の反抗」を執筆し、個人の自由・良心を国家が左右してはならないとし、問題があるときには税による抵抗をしてよいと主張した。「森の生活」後も、超越主義的視点から著作活動を続けたり、博物学を深めたり、奴隷制反対運動を行ったりした。

ソローは当初評価されず、自然描写しているだけの地方的な、変わり者とされ、生前は2冊の著作しか発表できなかったが、死後、評価が飛躍的に高まった。今や生態学や自然保護運動の先駆者としても評価されている。寄稿していたエッセー、紀行文や未発表論文、日記などをまとめたものは死後の出版である。

『森の生活』は、手を使った労働だけで外部や貨幣経済にほとんど依存せずに無駄なもののない慎ましやかな生計を営み、多大の自由時間の中で読書と研究をしながら、自然を観察 (四季の移り変わり、湖や動植物の生態) し、人生や文明や現代生活について思索を重ねた彼の集大成の作品である。「人間の第一目的は何か。人生をどう生きるか」ということを考える若い読者 (貧しい学究) へ向けて書かれた。そこでは、忙しさや金に追われる人間の愚かさ、一方での一部の人間精神の崇高性、動植物たちの清らかさ、地球・大地・川や湖など自然の生命力や美への驚愕、そして、特に春の生命再生の喜びが語られた。彼は、「実在が架空のものとなされる一方で、虚偽と妄想が確固たる真理としてもはやされている」といい、衣食住も、労働、学問、宗教、芸術、慈善行為さえもが、実質より、虚栄、虚飾、無意味へと墮落していると批判した。科学技術や情報や富は便利さという幻想をふりまいてにすぎず、われわれが求めるべきものは、幻想 (fancy) ではなく、実在 (reality) であるといった。その実在とは、抽象的思考の内部や、虚空でなく、額に汗して働くこと、五感を大事にすること、外部にではなく労働や暮らしそのものを楽しむこと、貧しく簡素な自主独立の生活、本物の読書、生活の中の余白 (時間に追われない暮らし)、生き生きとした自然との接触によって到達できるものであるとした。消費するニュースでなく、決して古臭くはならなかったもの (古典) を知るほうがよほど重要だと考えた。宗教に対しても、既存宗教の従属性や博愛主義を批判し、自分の体験をもとに、肯定的な生ある真実を獲得しようとしたし、「靈性」はそうした文脈で肯定されるも

のであった。彼は、労働によって生計をたてながら労働の奴隷とはならず、思想を打ち立て、「より高い法則」のために奉仕すること、自然と共に生きながら、自然の摂理と自分の思想にしたがって自由に生きることが、人生の道（答え）であると理解するに至り、実践したのである¹⁰⁾。

「世間の人々は、一般に必然と呼ばれている見せかけの運命を信じて、昔の本にもあるとおり、虫とさびにやられるか、盗人が押し入ってさらっていく財宝を積み上げることに汲々としているのである。これは愚か者の一生である」

「たいていの人々は、……しなくてもいい心配や余計な重労働に煩わされて、人生の素晴らしい果実を摘み取ることができないでいる。……働き詰めの間人は、毎日を心から誠実に生きる暇などもたない。……自分の知識をいつも振り回してはならない者が、人間の成長に必要な、あの無知の自覚を、どうして持ちつづけることができようか？」

「みんなが褒めたりもてはやしたりする人生は、数ある人生のひとつにすぎない。なぜ他の生き方を犠牲にして、ひとつの生き方だけを過大視しなくてはならないのだろうか」

「我々は、家を建てる楽しみを、いつまでも大工にゆずり渡したままでよいものだろうか？ ……この分業というやつは、一体どこまで行けば終わるのだろうか？ それは結局、なんの役にたつことになるのか？ もちろん、ほかのひとと私の代わりにものを考えてくれるかもしれないが、だからといって、私が自分でものを考えるのをやめたほうが良いということにはならないだろう」

「意識的な努力によって自分の生活を高める能力が、間違いなく人間には備わっているという事実ほど、我々を奮起させてくれるものはあるまい」

「その力は、見つめても見えず、耳を澄まして聞こえない。事物の本質と一体になっているので、そこから切り離すことができないのだ。……天地の霊力は、われわれの上にも左右にも、あらゆるところに遍在し、われわれをすっかり取り囲んでいる」¹¹⁾

「晴れやかな心が見えないようでは盲人と異なるころはあるまい！」

「人間自身の限界が乗り越えられるさまや、われわれが決して足を踏み入れないところで思いのままに草を食んでいる生き物などを目撃する必要がある。ハゲタカが、我々には嫌悪と意気阻喪しかもよおさせない腐肉をついばんで、この食事から健康と力を得ているのを見ると、力が湧いてくる。……“自然”がこれほど生命に満ち溢れているために、無数の生命が犠牲になったり、互いに貪りあつたりしても、なおそれが余裕綽々としているさまを見るとうれしくなる。……事故というものは起こりやすいのだから、それを軽くあしらえるようにつとめるべきなのだ。賢い人間は、宇宙に邪心がないことを知っている。毒は結局、毒ではなく、いかなる傷も致命傷ではない。同情といったものを擁護すべき論拠は、まずないのである。同情するならばききと事を運ばなくてはならない」

10) 以上の内容は、ソロー [1995] および、その訳者（飯田実）解説による。

11) ソロー [1995] 上, 13, 14, 41, 87, 162, 242ページ。最後の引用は、『中庸』第16章からソローが引用したものの。

「我々は内なるすべての新大陸や新世界を発見するコロンブスとなり、商売でなく、思想の新しい水路を切り拓こうではないか。人は皆ひとつの領土の主であって、それに比べれば、ロシアの皇帝の地上の帝国も、氷がとり残した丘陵程度のちっぽけな国家にすぎない。ところが、自己を尊敬することを知らず、卑小なもののために偉大なものを犠牲にするような人間でも、愛国者にはなれるのだ」

「たいていの人間は、町的生活扶助をうけるなんて汚券に関わることだとおもっている。ところが、不正な手段で暮らすことは別に汚券に関わることではないというわけだ。そのほうがよほど不名誉なはずなのに。賢人に倣^{なら}って、貧しさを庭園のハーブのように栽培しようではないか。……どこよりも味がいいのは、骨に近い生活である。貧しい分だけ諸君は軽薄な人間にならなくてすむわけだ。物質的に低い暮らしをする人も精神的に高い暮らしをすることによって失うものはなにもない。余分な富を持てば、余分なものが手に入るだけである。魂の必需品をあがなうのに金はいらない」

「私は、みずから評価し、決断し、自分をもっとも正しくひきつけるものの方に向かって行きたい。……私がたどることのできるたった一本の、どんな権力も阻むことのできない道をたどっていききたい」¹²⁾

シュタイナー

有名なシュタイナー系の主張も〈スピ・シン主義〉の具体像を伝える例としてあげられるだろう。シュタイナーは、人智学（アントロポゾフィー）創設者で、私より約100年前の人だ。彼の考えの基本は、人間の進化のプロセスと霊的な宇宙神学を結びつける霊学というところにあり、部分だけを取り上げると神秘主義や無根拠なものがあるが、後世への影響、実践を考えると¹³⁾、その主張の全体は、決して単なる非合理的な神秘主義ではなく、現実世界をよくする力をもったものである。

経済・法に加え、精神生活も重視する彼は、芸術的な洞察に優れていた。霊的な力が自然をとおして人間に働きかけ、現実表現となって開花するという論理で、色彩論やフォルメン線描といった美術の具他の技法を交えて展開し、芸術教育に問題を投げかけた。現代文学は治癒能力に欠けているがそれは間違いだとし、身体と芸術の関わりを考え、社会を芸術的な社会彫刻体として捉え、万人が芸術家になることをめざした。

仲間内、共同体内に閉じて満足する人ではなく、よく講演も行い、タイプの違う人、考えの異なる人とも意識的に交流し、よく聴き、否定的判断を沈黙させる行をおこなった。また彼は、並外れた実践家でもあった。厳しい状況で具体的なプランを実行しつづけた。まず理念があつてそこから行動がでるのでなく、その瞬間の状況から直感的に構想を練る人で、状況や直接的コミュニケーションから行動を起こす人であったといわれている。

そういうことを学び、どちらかというと考えただけの人生を送ってきた私は、やはり本

12) ソロー [1995] 下, 177, 266-7, 271-2, 284-5, 286ページ。

13) シュタイナー系の実践には多岐わたるものがある。魂の体操=オイリュトミー、シュタイナー学校、治癒教育、キリスト者の共同体運動、人智学の発想による銀行、農場、企業経営など。

物は実践する人だなと感じた。直感の大事さを思い、学者ではなく、様々な活動、社会運動を行っている人たちの素晴らしさに改めて目が行き、自分の人生もシュタイナーなど素晴らしい先人たちから学んで変えていく必要があるなど思った。

(続く)

文献

- 阿部珠理 [1994] 『アメリカ先住民の精神世界』 NHKブックス
デニス・バンクス&森田ゆり [1993] 『聖なる魂』朝日文庫
Curtis, Edward S. [1997] The North American Indian, TASCHEN 1997
ジェーン・キャッツ編 [1998] 『風の言葉を伝えて：ネイティブ・アメリカンの女たち』 舟木アデルみさ、舟木卓也訳、築地書館
萱野茂 [1990] 『アイヌの碑』朝日文庫
シオドーラ・クロバー [1991] 『イシ』行方昭夫訳、岩波書店
ピクマル、ミシェル編 (Michel Piquemal) [1996] 『インディアンの言葉』紀伊国屋書店
レフ・トルストイ [1968] 『民話集：人は何で生きるか』米川政夫訳、角川文庫
ヘンリーD・ソロー [1995] 『森の生活』飯田実訳、岩波文庫 (Henry David Thoreau, Walden, or Life in the Woods, 1854)
スティーブ・ウォール&ハービー・アーデン [1997] 『ネイティブ・アメリカン：叡智の守りびと』舟木アデルみさ訳、築地書館 (Steve Wall and Harvey Arden, Wisdom Keepers—Meetings with Native American Spiritual Elders, 1990)